

設立 平成24年 5月15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 令和 7年 8月 9日
(147号)

中之島ニュース

[事務局] 〒567-0861
茨木市東奈良2-7-10
人間学塾・中之島
事務局 古田修平
編集長 西村俊幸

「出会いの人間学」

野本三吉先生

(七月度特別講義より)



■命の原点

私は一九四一年東京で生まれました。この年の一二月に戦争が始まりました。ご存じの通りこの三年後には東京大空襲があり、一晩で10万人が焼け死ぬという凄まじい出来事がありました。あたりは火の海、私は三歳、母は生まれたばかりの妹を背負って逃げまどいました。こんな時代が私の出生でしたが、森先生もまた、出生の時代背景は非常に複雑で、両親に育てられず養子に出されることを体験されています。悲劇は人間にとって忘れたいことだと思いますが、私にとってもおそらく森先生にとっても、このことが人生の原点なのです。

■命の本質とは

私の父の夢は小学校の先生になることでした。それは叶わず、その夢を私に託しました。私が横浜国立大学に入学したのは、安保条約反対で日本中が荒れる一九六〇年のことです。大学では柔道部に入ったのですが、練習の時に受け身を取り損ね、意識不明となり救急搬送され

ました。母の見守る中、脳内出血の危険な状態から、私は奇跡的に甦るという体験をします。このとき初めて「自分が死ぬということ」を実感し、死ぬことと生きることの違いは何か？と考え続けるようになりました。食べること、空気を吸うこと、排泄すること、見ること、話や歌を聴くこと……これらはみんな生きていること。いや、こうして取り入れるだけではなく、体に入って吸収したら誰かに話す、涙が出る……など外に出すこともまた、生きること。つまり受け入れ吸収し、そしてそれを泣く・笑う・話す・踊る……等々自分を表現することがまた生きていることだと気づきました。そしてこれは一人ではできない。誰か相手が要るのです。相手がいることで循環が起る。実はこの関係そのものが生きているということだと気づけたのです。生きることは「関係が生きている」ということ、それは十八歳のときの入院中での大発見でした。命の本質とは、お互いに交流し、一緒に生きること、そのときに生きる実感が湧くのです。

■水滴の一滴

大学を卒業し、小学校の先生になりました。毎日楽しかったのですが、通信簿をつけるのが辛い。みんないい子たちで「1」の子どもなどいないのです。その評価する辛さに耐えられず、四年務めた教師を辞めました。誰かが誰かを評価するのではなく、本当にいきいきできる暮らしがあるはずだと日本中を巡りました。

共に学び共に生きる。その思いを胸に理想の共同体を求めている頃、森信三先生とご縁をいただき先生のご自宅で初めてお目にかかれまして。先生は着物姿でびっくりするほど大きな声で迎えてくださいました。先生は初対面の私の本を既に読んでおられ、親身になってくださいました。その後森先生の勧めがあり、横浜市職員として、横浜寿町という日雇い労働者の町で、教育を受けていない多くの子どもたちと住み込みで関わるようになりました。三〇歳のときです。困難な境遇の子どもたちを相手にこの活動

が始まりました。森先生が寿町に來られた。そのとき結婚で悩む私に、「全てはご縁、目の前のことに一所懸命に力を注げば自ずと協力する人が現れる」と言われ、その言葉通り出会いがあり、身内のみの結婚式に森先生は自らお越し下さいました。

その後先生はご長男を亡くされ、独居生活に入られ、その心境もお手紙でいただきました。今自分と同じような生き方をしている全ての人たち、子どもたちは皆私の兄弟だと思おうようにしたい、と言われた。みんな身内、家族と思っておられるのを感じました。

その後私は横浜市立大、沖縄大学と仕事をさせていただくのですが、その間も森先生とさまざまな相談をし「本当の意味で大学が変わらないと日本は変わらない」と話をしました。先生はこう言われました。「本質的なことは教員が命に目覚めることだ。命に目覚めるとは、相手と自分が一緒になって、共に苦しみ、共に喜ぶ関係性ができること。つまり教師は教える人ではなく、学び成長する人。君にできるのならやれ」。

森先生は開かれたコミュニケーションと言われた。共同体といえど小さなところは必ず孤立する。たった一人ではよいから仲間を作り、自分の思いの個人通信を出していくと、お互いの心が通じ合い、それがコミュニケーションとなる。それが本当の共同体だと言われました。一人一人が離れていても心が通じ合っていくこと、そして、大切なことは、一人一人が種をまくこと、一緒に頑張って支え合うことが開かれたコミュニケーションだと言われました。

『水滴の自叙伝』という自分史を書いたとき、自分は水滴の一滴だとはつきりと自覚しました。一滴は池になり川になりやがて海になる。そして天に昇り再び雨になり循環してゆく。時代を大きく変えてゆく原点は、一粒の水滴。一滴をおろそかにしては何事もないのです。

(抄録 中川千都子)

《グループ討議》 野本三吉先生

Aグループ

- ・共に学び共に生きる
- ・人間は関係の中で生きている
- ・一滴は大河の源 水滴として生きる

Bグループ

- ・一滴の水滴を次の世代へ繋いでいく
- ・共に学び共に生きる
- ・人間は関係性があつて開かれたコミュニ

ン

(共同体) になる。

Cグループ

- ・共に学び共に生きる
- ・水滴の一滴として生きる
- ・次世代への種まき

Dグループ

- ・生きることとは人間関係が大事
- ・水滴の一滴として生きる
- ・命はお互いに交流すること

全体として多かった感動語録

- ◎共に学び共に生きる
- ◎水滴の一滴として生きる
- ◎人間は関係の中で生きている



総合司会 岡本ユウコ塾生 講師紹介 近藤宏枝世話人



西田京子塾生・伊藤恵子塾生・橋本美津枝塾生



交流会にて
野本三吉先生 同席



人間学塾・中之島 7月読書会

Aグループ

- テキスト 「一語一会」7月
- 指導 近藤 宏枝 世話人
- 進行 西村 俊幸 世話人



七月三日

真の「誠」は、何よりもまず己のつとめに打ち込むところから始まると言ってよいでしょう。すなわち誠に至る出発点は、何よりもまず自分の仕事に打ち込むということでしょう。

七月十五日

真に一人の思想家に学ぶということは、そのような思想を生み出したその人の生活態度に学ぶことの方に、より重点を置いて考えるべきでしょう。

七月十九日

以前は「念々死を覚悟して初めて真の生となる」の一語を『一日一語』の表紙裏にサインしましたが、大患後では「死を覚悟してこの一日を生きん」となりました。

七月二十四日

如何にささやかな事でもよい。とにかく人間は他人のために尽くすことによって、はじめて自他共に幸せとなる。これだけは確かです。

Bグループ

- テキスト 「ありがとうございます」201~225
- 指導 中川 千都子 代表
- 進行 山路 直美 世話人



(五) 無限の無限の感謝が一杯！

207

本心の心は、プラス（光）の心です。業想念の心は、マイナス（闇）の心です。プラスの心は、プラスと波長が合うのです。マイナス（闇）の心は、マイナス（暗いもの）と波長が合うのです。

211

宇宙絶対神の御心をそのまま自分の心として受け入れる為には、謙虚に謙虚に、どこまでも謙虚に、素直に素直に、どこまでも素直になる必要があります。

219

プラスの言葉を使えば、プラスが実現するのです。マイナスの言葉を使えば、マイナスが実現するのです。すべては言葉通りになるのです。

225

神さまへの感謝報恩行を実行してゆくことが、本心開発の道です。神さまの大きな助けを受けて、過去世からの無限の業想念を消し去り、本心を開発していただく為には、ひたすらなる神さまへの感謝と報恩行が必要なのです。

あ田にも下いー野してれこらにけい分個れた
り一はちさう人本たいまど動野てまか人のコ
ま清いろつこ間先ハくしとい本い自ち誌場
す先つたんと学生ガのた次て先く分合の
。生も私の塾とキだ。のい生このうや暮
の私にだ、の通とそ命くはと分こりら
おのととき中、小信心のがと出だでと取
心近づと思つ之島、深た生活会と実なり
にくてえと島、こくめまさい改踐のをい
違にはて目、だににれれこめしだ重て
い居森なにで交流が、ま刻私る、そてとね
なて信り見の、通み達と生全確いお合
い見三まえご年、し、うるで致こき、
とて先せな講月かた共この目、しと下意
確い生んい話月をら。にと的出まをさ見
信てで。力に繋重始「学とは会し、りや
す下あそが働がねまこび続生いたや、感
るさりの働がねまこび続生いたや、感
のる、力いるてつう生けきな。り私想
で寺更はてと、た記きらるが更続もを

さし十四生と事ての性ま「教のご忌しの
十五時のご書が、人ら史し生活育の深遺「たの日は
歳間ごか速直しー研た。者学い徳は、のこ
の半自れ達ぐか教究。者方、今を、野本三吉先生と
運の宅てに育家昭として、森信三先生と、
命会をあハな者・和四十六年、の、
のおが初っガい。し群逸十六年、の、
出叶てそう、て生枝女十二の、
会訪問です、森信三先生、
いまし、た。に野本先生、
で、た。に野本先生、
感、年。にも本先生、
じ入代二も本先生、
りを十九関先生、
まし超九わら森、
た。ま七、先

「共に学び生きていく」

寺田一清先生に導かれて

③1 近藤宏

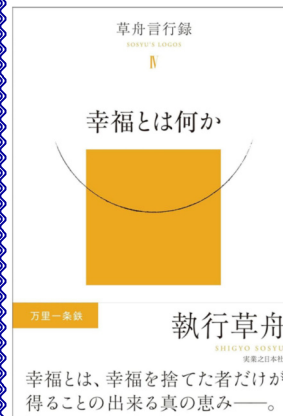
人間学塾・中之島 第14期 新たな一歩へ

人間学塾・中之島 第14期
12月 記念イベントを開催！

日時 2025年12月20日(土)
13:00~17:00
会場 大阪大学中之島センター
10階 佐治敬三ホール
参加予定者
人間学塾・中之島塾生
人間学塾・中之島卒業生
天分塾 卒業生
講師 上甲 晃 先生

塾生の皆様の積極的な参加をお願いします

1998年6月に天分塾創塾。
14期を経て、人間学塾・中之島が「塾是」として引継ぎ2012年9月開塾。
人間学塾・中之島は、9月より第14期を迎えることになります。
記念イベントを開催します。



『草舟言行録Ⅳ 幸福とは何か』(実業之日本社)
幸福の本質を問いかけてくる一冊。
本書第2講「道徳とは何か一真の幸福へ向かって」は本年3月の当塾での講話と質疑応答が掲載されています。
あなたの質問も活字になっているかも？
塾生必読の書。

執行草舟 先生新刊のご案内

『草舟言行録Ⅳ 幸福とは何か』(実業之日本社)

塾生だより

佐川 博敏 塾生

南極クルーズに参加して



【氷河の大地】
ブエノスアイレスから空路カラフエテへ。ロスグラシアレス国立公園のペリトモレノ氷河では遊歩道や小型船から巨大な氷壁を間近に見た。崩落の轟音、透き通る青。ウプサラ氷河では氷河の上を歩き、パタゴニアの大自然に心震えた。

【南極の白い世界】
南極航路では氷山が漂い、ペンギンたちが寄り添う姿に心が和む。クジラが海面を割る一瞬の迫力。地球最果ての静けさと生命の強さを五感で受け止めた。世界の果てで、人間の小ささを知る。

【歴史の港】

プリンタアレナスではマゼランの航海を伝える博物館やレプリカ船が興味深い。バルパライソは丘の街。カラフルな家々と坂道、植民地時代の建物が今も息づく。街全体が世界遺産、歴史の重みが漂っていた。

【孤島との再会】

絶海の孤島イースター島。モアイ像たちは静かに時を見つめる。23年ぶりの訪問、かつて保存修復の研究で滞在した記憶がよみがえる。変わらぬ風景と新たな気持ち。人と自然の営みを感じる場所。



【旅の終わり】

タヒチでは南国の風に癒され、アピアでは青い海に別れを告げた。95日間の航海が終わる朝、心に残るのは寄港地の景色と出会い、そして地球の広さ。旅は終わらず、また次の旅へ続く。

塾生の皆さまからのお便り・活動報告・広報など掲載します。メールにてご応募ください。

《人間学塾・中之島》次月案内

第14期スタート

◇日時 令和7年9月13日(土) 13時~17時

◇場所 大阪大学中之島センター

入塾式 6階 E F

塾生入場
代表挨拶
塾生スピーチ

交流会 9階サロンアゴラ

編集後記

暦の上では、先日七日で秋となりましたが、まだまだ真夏です。異常ともいえるこの暑さ。残暑お見舞い申し上げます。
暑いといえば、第十三期の人間学塾・中之島も熱く燃えました！改めて第十三期ご卒業、誠におめでとうございます。
緊張の入塾式にはじまり、常任講師の先生をはじめ多くの講師の方々に学ぶことができました。そして、素敵な塾生の方々と交流し、学ばせていただくこともできました。
卒業文集を拝見していると、今期は山口、朴の森、松下村塾などの宿泊研修がよかった、とのご感想が多かったように思います。一方、西尾千恵子塾生のご逝去など悲しいことも...
この一年、本当に皆様においても、いろいろあったと思います。新たな出逢い。嬉しいこと。悲しいこと。辛いこと...いずれも皆様方の糧となっていることは確かです。この一年の学びももちろん皆様の中で生きていきます。それを、それぞれ活かしていこうではありませんか！
本当にありがとうございます。

編集長 西村俊幸